



ドリトル動物病院長
(滑川市上小泉)

保田 裕起

新しく子犬や子猫を迎えられた家族は、とてもわんぱくでかわいらしい姿に心癒やされるものがあると思います。しかし、子犬や子猫はささいな転倒や落下によって大けがをしてしまうことがあります。今回は犬と猫の成長期特有の骨折である「成長板骨折」についてご紹介したいと思います。

成長板とは、成長期の骨の骨端にある軟骨性の板状構造で、骨が伸長し体格が大きくなる基点となっています。軟骨成分で形成されているため、比較的軟らかく、小

犬猫の成長板骨折

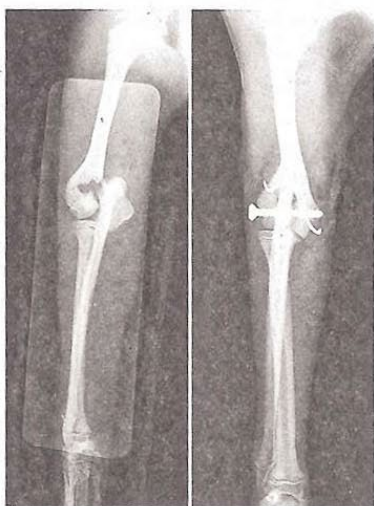
転倒・落下事故に注意

さな力（転倒や落下、着地の失敗など）によって骨折してしまつてことがあります。

成長板骨折は四肢の骨での発生が多く、特に大腿骨や脛骨、上腕骨で多く認められます。また成長板が骨折して損傷すると、骨の成長が阻害されるために骨の短縮や

変形などが生じ、関節の変形を引き起こすことが多くあります。

犬や猫の場合、約1歳齢まで成長板が存在し、成熟するにつれて骨化してなくなります。そのため、成長板骨折とは成長期のみに認められる骨端部分の特殊な骨折です。



左は成長板骨折を起こしたフレンチブルドッグの骨のレントゲン画像。右は手術後

治療は骨折のタイプによっても異なりますが、

多くの場合で手術が必要となり、ピンやワイヤ、スクリューなどを使用し、骨折部位の正確な整復と関節の再建を行います。正しく治療されなかった場合、変形癒合が起こり、将来的に変形性関節

症や跛行（うまく足が使えない症状）の原因となることがあります。

そのため早期診断と早期の治療が重要になります。骨折後、数日以上経過してしまつと骨折部位の癒着が生じ、手術が困難になることがあります。子犬や子猫を飼育されている飼い主さまは落下事故や転倒事故にご注意ください。時に目立った外傷がなく、いつの間にか骨折しているケースも散見されます。足をケンケンする、痛がるなどの症状がある場合は成長板骨折を起こしていることがありますので、なるべく早期に動物病院を受診しましょう。

毎月第1土曜掲載